



蟹江 憲史

かにえのりちか 国際関係論、地球システムガバナンス、編書に「持続可能な開発目標とは何か」51歳

テレビドラマ「半沢直樹」が大ヒットのうちに完結した。常に20%超の高視聴率を獲得するという驚異的な記録を残したドラマは、勧善懲悪の爽快さや、歌舞伎役者たちの絶妙な「顔芸」に注目が集まりがちだった。しかし、そうした面白さだけでなく、ここまでずば抜けた人気を得るものだろうか。大ヒットの隠れた理由があったように思う。

えてならないのである。コロナ禍や熊本地震のような大災害の後には、SDGsに体现されているような社会的に「良いこと」をする人たちが応援される傾向があることが明らかになってきた。そして、半沢直樹もまた、そうした例に名を連ねたという感がある。

半沢が闘い、「倍返し」を成し遂げたのは、不正を行う巨大資本や大物政治家であった。SDGsには、「平和と公正をすべての人に」と要約される目標がある。そして、この目標を具体化したターゲットの中に

は「あらゆる形態の汚職や賄賂を大幅に減らす」という項目もある。汚職や賄賂の事実を暴き、「効果的で説明責任があり透明性の高い」仕組みと行動へ向けて「既得権益と闘う。日本の政治状況を彷彿とさせるような演出の効果も含みながら、ドラマには、正しいことを正しいといえる爽快感があった。まさにSDGsが

店の女将といったように、組織の垣根を越えて集まり、目的を達成するのだ。これもSDGsのターゲットの一つ「効果的な公的、官民、市民社会のパートナーシップ」であり、同じ目標の達成を目指す多様な主体が連携するというSDGsの方法論そのものである。

金融機関に勤める半沢は、金融のDgsアクションプランの柱の一つにも盛り込まれ、また、昨年末に改訂されたSDGs実施指針でもステークホルダー（利害関係者）の一つとして重視されているのが金融（ファイナンス）分野だ。

「半沢直樹」のヒットは、社会がSDGsのような方向性を求めていることを如実に示したのではない

## 半沢直樹とSDGsの「変革」

表していることだ。大事なのは、この勧善懲悪が、水戸黄門的な「お上」の力を使ったものではないことだ。権威を振りかざして屈服させるのではなく、逆に、振りかざされる権威に一会社社員が立ち向かっていく。それだけではない。最後には同じ志を持つ仲間が、会社だけでなく金融庁、さらには料理

役割にも折々で触れていた。弱者の力になるように、金融の力で世の中を変革するというのは、「誰一人取り残されない」社会の構築を目指すSDGs金融の姿と一致する。これもターゲットとして、多くの小規模製造業などが利用しやすい融資などの金融サービスの構築を掲げている。政府が重点課題として掲げるS

か。SDGsの中身をよく見ていくと、誰もが「正しい」と考え、否定のしようがない事柄のリストであることに気付く。平たく言えば、「良いこと」のリストなのである。半沢も、そうした原点を真面目に追求し、矛盾に対してあらゆる手段を使って戦い抜く。そして、最後には勝つ。エンターテインメントによ

って、今の人々が求めているものが端的に描き出されていたとみることができる。ただし、現代社会の現実にとった話であるがゆえに、ドラマの有り様は、SDGsの観点から見るとまだまだ達成していない点も多かった。銀行の取締役会は男性ばかりで、半沢の周りで意思決定を行う人々も、9割方は男であった。ジェンダー指数が先進国で最低レベルの日本を反映しているといえはその通りであるが、もう少しジェンダー平等の視点を入れても良かったように思う。その点からいえば、金融庁のやり手の担当者黒崎検査官がジェンダーフリーだったことが、唯一評価できる点だったろうか。

ドラマが終了し、「半沢ロス」の人も増加中だという。今度はSDGsで、自らが変革の先頭に立つことで、「ロス」を乗り越えていくことを期待したい。